

マンデラ生誕 100 周年を迎えた南アフリカ

牧野久美子

◇はじめに

今年 2018 年は、南アフリカのネルソン・マンデラ (Nelson Mandela) 元大統領の生誕 100 周年にあたる。9 月にはニューヨークの国連本部で、マンデラのレガシーを記念した平和サミットが開催されるとともに、マンデラの等身大の銅像がお披露目された。アパルトヘイト体制と闘って 27 年ものあいだ獄中につながれ、その後大統領として南アフリカの人種融和と国民統合に尽力したマンデラは、南アフリカの人びとにとっての英雄であるのみならず、世界でもっとも尊敬を集める人物の一人といえるだろう。

他方で、アパルトヘイト体制が終わって四半世紀近くが経過してもなお、南アフリカはきわめて格差の大きな社会であり続けており、マンデラの理想と南アフリカの現実とのあいだには大きな落差がある。本稿ではマンデラの功績をあらためて振り返るとともに、マンデラなき南アフリカの現状についても述べることにしたい。

◇マンデラの生涯

マンデラは 1918 年 7 月 18 日に、トランスカイ (現在の東ケープ州) のムヴェゾという小さな村で、地域の有力者の息子として生まれた。出生時に与えられた名前はロリシャシャ (Rolihlahla、コサ語で「木の枝を引っ張る」という字義から転じて「トラブルメーカー」を意味する) で、ネルソンというのはミッション・スクールへの入学後、教師から与えられたクリスチャン・ネームである。尊敬と親しみを込めて、マンデラに対しては氏族名であるマディバ (Madiba) という呼称が用いられることも多い。

学生運動に参加したため 1940 年にフォートヘア大学を退学処分となったマンデラは、南アフリカ最大の都市ジョハネスバーグに移り住み、法律事務所で働きながらアフリカ民族会議 (African National Congress: ANC) の活動に関わるようになった。ANC は南アフリカの黒人の権利獲得を目指す組織として 1912 年に創設された。1948 年に国民党が政権につき、体系的な人種差別制度としてのアパルトヘイトが始まったのを受けて、それまで請願などの穏健な手段に頼っていた ANC は、抗議のための大衆行動に軸足をおくようになった。この方針転換の原動力となったのが、マンデラを創設メンバーの一人とする ANC 青年同盟であった。

1952 年にマンデラは人種差別的な法律を意図的に破る不服従運動 (Defiance Campaign) を指揮した。1960 年に非合法化された ANC が武装闘争へと踏み出した際には、マンデラは

ANCの軍事部門「民族の槍 (Umkhonto we Sizwe、通称 MK)」の組織化を中心的に担った。マンデラは地下潜伏中の1962年に逮捕され、1963年から1990年まで獄中で過ごすことになる。マンデラが27年の獄中生活のうち18年を過ごしたケープタウン沖のロベン島は、現在は島全体が博物館として一般公開され、ユネスコの世界遺産にも登録されている。

1980年代半ば、南アフリカ各地で激しい抗議運動が繰り広げられ、アパルトヘイト撤廃を求める国際社会からの圧力も高まるなか、獄中のマンデラは密かに政府との交渉の試みを開始した。武装闘争の放棄を条件とする釈放を持ちかけられたもののマンデラは断り、結局1990年、当時のF. W. デクラーク (Frederik Willem de Klerk) 大統領はマンデラの無条件釈放に応じ、ANCの非合法化措置も解除した。1991年からの「民主南アフリカ会議 (Convention for a Democratic South Africa: CODESA)」を通じた民主化交渉を経て、1994年、南アフリカ史上初の全人種参加による総選挙が行われた。ANCが選挙に勝利し、その党首であるマンデラが大統領に就任したことで、アパルトヘイト体制はついに幕を閉じた。

同時期に一党制や軍政からの体制転換を経験したアフリカの国々のなかには、民主化の過程で混乱が起き、内戦に陥った国も少なくなかった。そのことを考えれば、南アフリカの体制移行が大きな揺り戻しもなく比較的スムーズに行われたことは特筆に値する。1995年の南アフリカ開催のラグビー・ワールドカップを舞台とした映画「インビクタス」で描かれたように、大統領としてのマンデラは、報復を恐れる白人の不安に配慮し、人種融和に心を砕いた。それは非人種主義 (non-racialism) へのマンデラの信念によるものであると同時に、アパルトヘイト後の南アフリカの政治的・経済的安定のための戦略的な振る舞いでもあった。

マンデラは大統領を1期5年務めたのち、1999年に退任し、政界を引退した。数十年にわたる長期政権が珍しくないアフリカにあって、自らあっさり大統領の座を降りたマンデラの潔さは際立っている。その後のマンデラは、自身の名前を冠した財団を通じてさまざまな社会活動を行なった。とくに、マンデラが子どもをこよなく愛し、ネルソン・マンデラ児童基金を通じて子どもの支援活動に力を注いでいたことはよく知られている。また、自身の知名度を生かして、HIV/エイズや貧困といったグローバルな課題に関する啓発活動にも積極的に取り組んだ。マンデラは2013年12月5日、ジョハネスバーグの自宅で95歳の生涯を終え、故郷の東ケープ州に埋葬された。

◇2018年の南アフリカ

マンデラ生誕100周年の節目となる今年、南アフリカではマンデラにちなむ様々なイベントが目白押しである。南アフリカの紙幣には、すでに2012年から片面にマンデラの肖像画がデザインされているが、今年7月にはマンデラ生誕100周年記念として、通常は「BIG 5」と呼ばれる南アフリカを代表する動物が印刷されているもう片面にまでマンデラの姿が描かれた紙幣が発行された。各種の記念グッズもつくられ、大手スーパーマーケットチェー

ンのウールワース (Woolworths) では、マンデラの顔がでかでかと印刷された T シャツやエコバッグが売られていた。

マンデラの誕生日の前日にあたる 7 月 17 日には、アメリカのバラク・オバマ (Barack Obama) 前大統領がジョハネスバーグのスタジアムで記念講演を行った。「私はネルソン・マンデラのビジョンを・・・平等、正義、自由、多人種民主主義のビジョンを信じています。そして私は、そのような原理によって統治される世界が実現可能であると信じています。」

1 万 5000 人の聴衆を前にこのように語ったオバマは、マンデラの行動と思想から深い影響を受けたことを、これまでもたびたび公言している。南アフリカとアメリカ合衆国という、ともに幾世紀にわたる人種的抑圧を経験してきた国で史上初の黒人大統領となった 2 人のあいだには、特別な精神的紐帯がある。2013 年 12 月のマンデラの葬儀の際にも、当時現職のアメリカ大統領だったオバマは、ひとりの人間としてマンデラから学んだことについて印象深いスピーチを行なっている。

しかしながら南アフリカの現状は、「平等、正義、自由、多人種民主主義」というマンデラのビジョンの実現には程遠いと言わざるを得ない。南アフリカの格差はアパルトヘイト後にむしろ広がっており、今年刊行された世界銀行の報告書によれば、2015 年時点で南アフリカは世界でもっとも不平等な国の一つであった。また、貧困線以下で生活する人口の割合は、アパルトヘイト後にいったん減少したものの、2011 年以降に再び増加に転じているという (Victor Sulla and Precious Zikhali, *Overcoming Poverty and Inequality in South Africa : An Assessment of Drivers, Constraints and Opportunities*, Washington, D.C.: World Bank Group, 2018)。

かつてと違うのは、大企業や公的機関の幹部職に就く黒人が増え、一握りの富裕層のあいだでの多人種化が進んでいることだが、貧困が黒人、とくに女性に集中している状況は変わっていない。アパルトヘイトの廃止により、法律による人種差別はなくなったが、人種、階級、ジェンダーが複雑に交差する南アフリカの不平等構造は、いまでも厳然と存在している。蔓延する貧困、その背景にある高失業率、そして暴力的な犯罪の多さといった様々な課題についても、解決への道筋が見えない。

マンデラがその生涯を捧げた ANC は、近年は腐敗のスクandalが絶えない。腐敗の背景には、政治権力へのアクセスが、公的な役職や政府および国営企業との契約といった経済資源の獲得に直結するという事情がある。とくに今年 2 月に辞任したジェイコブ・ズマ (Jacob Zuma) 前大統領のもとでは、「国家捕獲」(state capture) と呼ばれる大規模な公的資源の篡奪が行われた。ANC 政権の腐敗、そして社会変革が遅々として進まないことへの不満を背景として、近年の南アフリカでは抗議運動が頻発しており、それに対する暴力的弾圧もエスカレートしている。2012 年には労働条件の改善を求める鉱山労働者に警察が発砲し、34 名が死亡する事件があった。アパルトヘイト時代の抗議運動への弾圧を彷彿とさせたこの事件は、南アフリカ社会に大きな衝撃を与えた。

植民地支配とアパルトヘイトの歴史の過程で繰り返行われた土地収奪や強制移住の影響が色濃く残る土地問題は、南アフリカ社会の最大の火種の一つである。農業適地の多くを

白人農家が独占しているという農村部の問題だけでなく、都市部の居住用地をめぐる問題も深刻であり、所有権をもたない人びとによる土地占拠事件もしばしば起きている。経済的自由のない政治的自由など無意味だと主張し、補償金なしでの土地の強制収用と再分配を公約の筆頭に掲げる「経済的自由戦士」(Economic Freedom Fighters: EFF) という 2013 年に結成された政党が勢いづいていることに ANC 政権は神経をとがらせている。現大統領のシリル・ラマポサ (Cyril Ramaphosa) はビジネスの経験が長く、私的所有権の保護や政策の安定性を重視する投資家心理を熟知している人物であるが、にもかかわらず補償金なしでの土地の強制収用を可能にするための憲法改正に前向きな姿勢を示しているのは、EFF の台頭を睨んだ来年の総選挙対策という意味合いが強い。

ANC は解放闘争の実績——「マンデラの政党」であること——を最大の政治資源として、1994 年の初の全人種参加総選挙以来、一貫して政権与党の座を守ってきた。しかし、経済の低迷を背景とした貧困悪化や失業率の高止まり、そして腐敗問題への批判から支持率は低下傾向にあり、来年の選挙戦はこれまでにない厳しいものになると予想されている。

◇おわりに

「黒人も白人も、すべての南アフリカ人が、恐れを抱くことなく胸を張って歩くことができ、人間の尊厳への権利がいかなるときでも守られるような社会を、平和な『虹の国』を築いていこう」——マンデラが 1994 年 5 月に行なった大統領就任演説の有名な一節である。それから四半世紀近くが経過した南アフリカは、決してマンデラの理想の「虹の国」にはなっていない。それでも、筆者は南アフリカに絶望してはいない。それは、アパルトヘイトという「人類に対する犯罪」の苦い経験を経て、平等や自由、人権といった理念や価値観が南アフリカ社会で広く共有されているように思われるからである。それらの理念や価値観を体現するのがマンデラであり、マンデラは人種や支持政党の違いを越えて、南アフリカの人びとから広く敬愛されている。

マンデラ生誕 100 年となる今年、様々な記念行事を通じて、南アフリカの人びとはマンデラが抱いていた理想のビジョンをあらためて想起することとなった。ここまで再三述べてきたように、マンデラのビジョンと南アフリカの現実との間には眩暈を覚えるほどの落差がある。しかし、理念が現実を動かしうると証明したのもマンデラその人であったことを忘れないようにしよう。2013 年、マンデラの葬儀でオバマがこう語ったように——「マンデラは私たちに、行動の力だけでなく、理念の力をも教えてくれました。」

牧野久美子 (まきの・くみこ)

ジェトロ・アジア経済研究所研究員、(特活) アフリカ日本協議会理事。現在、ウィッツ・スクール・オブ・ガバナンス客員研究員として南アフリカ・ジョハネスバーグで在外研究中。

主な著作に、牧野久美子・佐藤千鶴子編『南アフリカの経済社会変容』アジア経済研究所、2013年、宇佐見耕一・牧野久美子編『新興諸国の現金給付政策』アジア経済研究所、2015年ほか。

=====